



みやこふうりゆう  
都風流

昭和二十二年(一九四七)

作詞 久保田 万太郎

作曲 四代目 吉住 小三郎

二代目 稀音家 浄観

(三下り)

これよりしてお馬返しや 羽織不二

富士とし云えば 筑波嶺の

川上さして行く船や

芦間隠れに おもしろき

白帆の影の 夏めきは

千生り市の 昼の雨

草市照らす 宵の月

柳のかげに 虫売りの

市松障子 露暗き

つゆの声々 聞きわけて

鉦を叩くは かねたたき

ふけては秋に通ふ風

(本調子)

— 虫の合方 —

きくくよう  
菊供養 菊の香もこそ 仲見世の  
ひとなみ  
人波わけて うち連るる  
としかさ  
わけて一人は 年嵩の



目につく婀娜な 挿し櫛も

はや時雨月 時雨降る

べったら市の 賑いも

昨日に過ぎて 押し照るや

酉の 日ちかき 星の影

引けは九つ なぜそれを

四つと言ふたか 吉原は

拍子木までが うそをつく

さの工

— 新内合方 —

(二上り)

お齒黒溝に 映る火も

明けてあとなき 霜晴れの

熊手にかかる 落葉さへ

極月今日ぞ 年の市

— 竹葉の合方 —

— 境内埋めし —

— 雪の合方 —

— 雪の傘 —

